（別紙4）　令和　3　年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	4393100211		
法人名	株式会社　いわしや窪田		
事業所名	グループホームやすらぎの里　さがら		
所在地	熊本県球磨郡相良村柳瀬　973		
自己評価作成日	令和4年3月9日	評価結果市町村受理日	令和4年6月1日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人　あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13－12－205
訪問調査日	令和4年3月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

介護方法や認知症、身体拘束・虐待についての勉強会を行うことで、職員の知識や資質向上を図っています。コロナ感染症の影響で勉強会を予定していても中止せざるを得なくなることもしばしばありましたが、普段の介護の中でもスタッフ間での連携が取れており、皆で声掛け合いながら適切な介護を提供出来るように心掛けています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

静かな田舎暮らしが満喫できる暮らしの中で、ユニットによる楽しみ方は違えども笑って過ごせる環境が作られ、地域住民が気軽に立ち寄れるホームを目指してきた事が功を奏し、近隣からの入居により更に地域への啓発が進んだホームである。一昨年の大水害を経験し、警戒レベルに合わせ全員避難を行う等有事に対する体制を整えている等危機感を高くし、コロナ禍のなかで、状況を見ながらの保育園児との相互交流や、ボランティアとの交流等メリハリのある日常を支援している。今年はユニット同士が方向性を一つにするとして組織体制や業務の流れを見直す等新たなホーム作りに努力されている。また、“やすらぎの里たより”の創刊は、家族や地域への情報発信源として期待される他、次のステップとしての構想も聞かれ、今後の展開に大いに期待したいホームである。

Ⅴ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	↓該当するものに○印	取り組みの成果
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる （参考項目：23,24,25）	○	1. ほぼ全ての利用者の
			2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある （参考項目：18,38）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている （参考項目：38）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている （参考項目：36,37）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている （参考項目：49）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている （参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている （参考項目：28）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	↓該当する項目に○印	取り組みの成果
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている （参考項目：9,10,19）	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている （参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている （参考項目：4）		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている （参考項目：11,12）	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

事業所名：グループホームやすらぎの里さがら

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	外部評価 次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	（1）	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	各部署に「理念」を掲げ、出勤時に復唱をするよう指導しており、職員一同、共有した実践を行っています。	地域に根ざしたホーム作りに邁進するホームでは、理念3項目の唱和や掲示により意識強化を図っている。入居者を中心として、地域の支えがあってこそホームの存在があるとして捉えるホームでは、コロナ禍の中で今できる地域との関係性の充実に取組んでいる。	
2	（2）	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設行事に近くの保育園児を招いたり、逆に保育園の行事にご利用者を招いて頂くなど地域との交流も出来ています。	保育園との相互交流（園児とのジャガイモ掘り、散歩中の園児の立ち寄り、災害学習の一環として七夕の飾り付け、クリスマス会には歌いに来訪する等）、農作業中の住民との歓談や、区長により回覧板の持ち届け、中止になったおくんち祭りにかわる獅子舞の訪問や、誕生会には地域のボランティアによる踊り等地域の中での生活基盤は充実しつつある。職員も道路の除草作業を行ったり、神社の掃除への参加等地域の中にあるホームとして活動している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	村の介護事業計画などの会議に参加し、意見を述べるなど、出来る限り地域に貢献出来るように心掛けています。		
4	（3）	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に一度の推進会議を計画するが、コロナの影響で実施できないことが多く、会議を実施した際は、必要事項などを職員に報告し、ご利用者支援に繋げています。	コロナ感染症の状況を見ながら、対面での開催が可能かどうかを決め、書面開催時には資料を配布している。対面での開催時には2ヶ月間の状況を報告し、テーマをもとに話し合っている。外出傾向のある入居者対応には何故帰りたいかを追求することや、不定しないこと、一緒に歩いてみる等のアドバイスを得ている。また、老人会や消防団がホームに介入する方策等についての双方向での意見交換等運営推進会議の意義を見出し、サービスに反映させるとしている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	推進会議の開催や施設運営にまつわる事項に於いて、日頃より行政と連携をとり、信頼関係の構築に努めています。	運営推進会議によるアドバイスや、介護事業計画等の地域福祉に関する会議への参加、豪雨時の避相談の他、地域包括支援センターからの入居相談等協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	管理者自ら『身体拘束ゼロ』の理念を掲げ、センサーも拘束の一つと捉え、代替え方法を皆で検討し、更なる意識向上に取り組んでいます。	理念として掲げる”安心したゆっくり過ごせる場所の提供”として、身体拘束及び虐待は絶対に行わないことをまず謳い、身体拘束廃止委員会を同法人のグループホーム合同で開催し、事例を参考にした研修等を行っている。“虐待の芽チェックリスト”による振り返りや、言葉使いについては特に指導している。外出傾向の高い入居者への声掛け「だめ」と言うことも拘束に当ると認識し、グループラインを活用し状況を共有している。センサーの代替えとして呼び鈴がわりに鈴を合図とする方には、転倒予防として職員の観察力や気づきを発揮する事としている。	外出傾向の高い入居者を課題として対応方法等を運営推進会議に提示し適切なアドバイスを得ている。今後も、外出したい傾向を把握し、見守りを徹底されることを期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	入浴や排泄介助の際も、不審な痣や内出血など無いか意識して皮膚の観察を行うよう指導しています。また言葉によるものも含め職員間で声掛けしながら虐待防止に努めています。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	資料などを基に勉強会を設け、理解と知識の向上を図り支援を行っています。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所の契約時は、内容の説明を丁寧に行い、ご家族や関係者のご理解と納得を得ています。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご意見箱を設置し、ご家族との連絡も密に取り、得た要望や情報などは、職員一同にて周知し、日常生活支援に反映出来ています。	入居者には職員が座って話をしながら心配事や相談等を引き出している。家族との面会はコロナ感染まん延防止措置等により中止してはいるが、玄関先での面会や窓越し面会により不安軽減の一環としている。“やすらぎ便り”を創刊しており、家族に配布する予定である。また、誕生会に家族を呼ばれたこともあり、家族同士の交流会等も行う構想もある。入居者や家族からの要望等は記録に残し精査する体制としている。	コロナ禍にあり、家族との面会は中止せざるを得ない状況にあり、面会が可能になれば家族や入居者も一緒に話し合いたいとの意向もある。家族の参加が難しい状況であれば、議事録等を配布し、意見等を収集されることを検討頂きたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	必要に応じて面談を行ったり、会議などで得た意見は真摯に受け止め、運営に反映させています。	各棟での申し送りを徹底し、月1回の会議により問題点を提示した話し合いを行っている。ユニット同士の業務の違いもあるなかで方向性を一つにすることや休憩時間を含めた業務を見直す機会とする他、記録漏れ対策や組織図の検討等に取組んでいる。	職員との協力体制が出来てきたことにより、更に書類を充実させたいとの意欲的な姿勢で臨まれている。今後も、ユニット間で情報を共有いただきたい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個々の職員の能力、就業実績や態度など状況把握に努め、適切な環境で働けるよう職場環境づくりに努めています。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部、外部の研修をはじめ、各人に沿った必要な内容の研修などを受講機会にあて、資質向上に取り組んでいます。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会の主催するブロック会等に参加し、外部職員との交流を設け、施設運営やサービス向上に反映させています。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	基本情報を基に、ご利用者の情報把握に努め、行動観察や傾聴を行いコミュニケーションを図っています。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	介護計画書作成段階時など、ご家族の意見、要望などを取り入れ、コミュニケーションを密にとり、安心の信頼関係を図っています。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	基本情報を基に、ご家族の気持ちを汲み取り、必要な支援づくりに努めています。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日課表に沿って過ごして頂くが、無理強いはせず行動パターンを掴み、本人のペースに合わせせることで、ご利用者との関係づくりに努めています。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族との情報交換を行い、連携の理解を頂きながら、ご利用者の支援に繋げています。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現実、認知症が進行しているため、交流や関係継続には困難さがありますが、会話を通して思い出して頂くなどの支援に努めています。	入居者からは行きたい場所等の希望は出されないが、水害で家を無くされた入居にはその跡地に出かけたり、神社へのドライブや災害復興プロジェクトの一環である竹灯籠の見学等に出かけている。人吉新聞からの情報、特に相良村の事には関心を向けられるようである。入居者同士が入居者と職員が知り合いという馴染みの関係にある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご利用者が孤立しないように、交流を積極的に行い、関係性を維持しています。時にはご利用者間での口論も見られますが、様子を見ながら仲裁支援に心掛けています。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスの利用が終了しても、支援が出来るようにご家族にお伝えしています。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	（9）	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご利用者の話を傾聴することで、思いや意向などを汲み取り、把握に努めています。コミュニケーションが困難な場合も、思いを察するよう努力しています。	入居者の中には直接職員に申し出られることも有るが、職員が入居者の話に耳を傾け、共感・受容しながら、思いを察知している。コミュニケーションが取れない方には表情や行動、笑顔をバロメーターとして、本人の立場に立って検討しケアに反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	基本情報を基に、ご家族やご利用者本人に確認して、日常生活に反映出来るように努めています。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	基本情報を基に、サービス提供していくが、日々変化していくため、職員間の申し送りを徹底し、一人ひとりの状態把握に努めています。		
26	（10）	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご利用者の状態把握や情報収集に努め、会議などで意見交換を行い、ケアプラン作成に反映させています。	本人・家族の意向のもと、短期目標3ヶ月として具体的な内容の介護計画を作成している。管理者・看護・介護職員等によるサービス担当者会議を開催し、家族には電話によru説明のもと新たなプランを作成している。	入居歴によっては、見直しの期間が長くなっている場合も有り、プラン見直しの期間など検討頂き、入居者の状況に応じたプランを作成頂きたい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の経過記録や職員間の申し送りなどで情報を共有し、日常生活支援に活かしています。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	状況に応じて対応している中でも、工夫やアイデアを生かし多方面からのサービスが出来るように努めています。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	認知症での困難さはあるが、状態を把握した上で地域資源の活用に努めています。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月に一度の主治医による往診や、歯科などの協力医療機関などとの連携により、適切な医療が受けられるように支援しています。	殆どの入居者が協力医療機関からの往診であるが、入居前からのかかりつけ医への受診にも応じており職員が受診を支援している。歯科は家族と相談し送迎のある協力歯科を利用されている。毎朝のバイタルチェックにより異常があれば再検し、管理者や看護職員に報告し、必要によっては早期受診を支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常的にご利用者の体調観察を行っています。変化が見られれば施設看護師による状態把握を行い、必要があれば受診なども行っており、異常の早期発見に努めています。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	主治医と連携し、病院関係者と情報交換を行い、受診や入院の調整を行っています。入院時はおおよその入院期間を把握した上で、ご家族を含めた退院後の検討も行っています。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所の契約時に、ご家族へ説明し同意を得ています。重度化した場合、方針に基づきその都度ご家族と相談し、最良の支援を行うようにしています。	重度化及び終末期に向けた指針を基にホームの方針を説明し、家族との同意書を交わしている。入居者の状態変化等必要な時点で家族と話し合い、再度意向を確認している。医療中心でなければ、ホームでの看取りに応じる事としているが、これまでに終末期の経験はない。介護度により特養へ申し込みをされている方や、家族と相談し特養へ申し込み中の方もおられる。看護職員が多数在職しており、日々の変化を見逃さず、早期対応に努めている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急連絡網を作成し、急変時に備え、速やかに対応出来るよう随時訓練を行い、周知徹底を図っています。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	水害訓練に関しては、毎年大雨時、実際に避難を実践しています。消防訓練も定期的に行い、地域消防団とも連携を図り、協力体制を築けています。	一昨年の大水害で被災した経験から、昨年も警戒レベルに合わせ実際に避難するなど有事には直ぐに動ける体制としている。入居者の中には、大水害の記憶から雨の日を心配されたり、雨量が激しくなると職員がおにぎりを準備する等教訓として息づいている。避難時の行政の協力や、地元消防団が運営推進会議のメンバーとして名を連ねる等普段から連携を図っている。	消防署の指導の下、火災を想定した総合訓練が予定されている。備蓄は準備しているものの情味期限のチェックが出来ていない等、見直しの必要性を認識されており、リストを作成されることが期待される。
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ご利用者を尊重し、思いやりを忘れず、パーソンセンタードケアの実践に取り組んでいます。	入居者の意思を尊重し、入居者を主体(職員の都合で仕事をしないこと)としてケアに取組んでいる。呼称は苗字にさん付けが基本であるが、地域の中で呼ばれていた呼び方でも対応し、ちゃん付けでは呼ばないこととしている。職員には入職時に守秘義務について説明し誓約書を交わし、個人情報の保護に努めている。	職員の言葉使いについては、管理者を通じて指導されている。今後も命令口調にならないように、職員同士で注意喚起いただきたい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活を送る上で、常に寄り添い、傾聴を行うことで、ご利用者の思いを引き出し自己決定に繋げています。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日課表を基に、ご利用者のペースに合わせ、慌てず穏やかな暮らしの支援に努めています。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	家族へも協力を依頼し、季節ごとの衣類の整理を行い、毎日の身だしなみに注意し、清涼感ある生活支援を行っています。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	毎食前の口腔体操から献立の発表を日課とし、食の安全と楽しみに繋げています。また季節ごとに、おやつ作りにも取り組んでいます。	地元の米を使った炊飯や汁物はホームで調理し、副食は配食サービスを利用している。副食についてはアンケート調査が行われており、職員は入居者から聞き取った声を業者に上げ、メニューに反映させている。収穫した野菜は手作りおやつや保存食に活用されており、作業の過程も入居者の楽しみに繋げている。（誕生会に向けたケーキ作り、梅ちぎりから梅干し作りまで、ジャガイモの収穫、団子作り等）	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	基本情報を基に、それぞれのご利用者の食事形態や食事量、水分量を調整し、チェック表にて摂取状況を確認しています。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの声掛け、誘導を行い、口腔内の観察や清潔保持に努めています。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を基に、ご利用者個々の排泄パターンを掴み、尿便意の意思表示に寄り添った態度で臨むようにしています。	入居者個々の排泄パターンを確認し、時間や間隔を見ながら尿意の有無にかかわらず声を掛けている。自らトイレに行く方、夜間もトイレに行く入居者等もあり、職員は見守りを徹底している。排泄用品は下着・リハビリパンツのみ、パットの併用等尿量を考慮し活動を妨げないものを選択している。夜間帯のみオムツを使用する入居者にはベッド上での交換として気持ちよく就寝してもらうよう支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の有無に関して、チェック表やカルテに記載し、内服薬にて排便コントロールを行っています。また、排便困難者に対しては、定期往診時に主治医に相談しています。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本週2回の入浴を午前中に実施しているが、拒否があれば無理強いせず柔軟な対応をとっています。また、必要に応じて、夜間浴も行っています。	入浴は週2回午前中を中心に対応しているが、夜間の入浴の希望にも対応している。入浴拒否時には無理強いすることなく清拭などにより清潔保持に努めているが、、間隔が空く場合には家族や職員間で話し合い納得のもと入浴を支援している。ゆずやしょうぶ湯等も利用し見当識に反映させている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は離床を基本としているが、個人の要望に合わせ居室で過ごすなど、柔軟な対応をとっています。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服管理は厳重に行い、誤薬が無いように徹底しています。また体調管理に努め、日頃の観察も怠らないように支援しています。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	レクレーションやバスハイクなどでの気分転換や、個人のレベルに合わせた楽しみを提供しながら、日々の活性化を図っています。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で面会も行えていない状況ではあるが、定期的に散歩やドライブなど行っています。今後機会があれば地域行事の参加などにも積極的に支援していく予定です。	外出が難しい年ではあったが、地域の様子を車窓から眺めたり、天候の良い日には散歩に出かけ季節の移り変わりを楽しんでいる。また、庭先に出ると桜や菜の花、モクレン等が咲き誇り、入居者と職員が長椅子に腰を掛け、春の一日を楽しむ様子が確認された。	管理者は、コロナ収束後に向けて家族の協力を得ながら、外出を含め出来ることには何でもチャレンジしていきたいという構想もあり、ぜひ実現して頂きたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	認知症の進行にて、金銭管理が困難であるため、所持や預かりは基本行っていませんが、時に地域の商品券を頂いた際は、近くのコンビニなどで買い物支援を行っています。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯所持のご利用者に関しては、充電などの管理やいつでも操作できるように支援しています。また手紙を書かれた際も、ポストへの投函など代行しています。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設内は日々清潔に努め、生活通路には休憩できるよう椅子のみを置き、リビングにはゆっくりくつろげるソファーを設置しています。また玄関や壁には季節感ある飾り付けも施しています。	感染症対策に共有空間や居室の掃除、消毒、換気を徹底し、入居者が安心して過ごせる空間としている。玄関には交流のある保育園児の写真や季節の花を生け、日中活動の中で入居者の共に作成した作品をリビングに展示している。食後は馴染みの方言や歌が飛び出し終日賑やかな空間である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	カラオケで交流できる空間があり、日々楽しまれておられます。またご利用者一人ひとりが自由に過ごすことの出来る空間作りに心掛けています。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	2年前の豪雨災害により、家具など無くされている方も居り、馴染みのものなどはあまり置かれていませんが、新規ご利用者の家族へは積極的に働きかけています。	入居に際し、馴染みの物の必要性を説明し、これまでに使われていたものの持込みを依頼している。テレビや椅子を持参し読書スペースとしたり、こだわりのあるポータブルトイレの持参や、位牌に花を供え、毎日水をあげる等自宅の生活の延長線上としての捉えた居室もある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内の清掃、整理整頓を毎日実施、確認を行って、安全な環境作りに努めています。		